

『魂のささやき』

五四、信後の真似をするな

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、後生の苦がぬけたか、信樂開発の一念が諦得出来た

か、真仮の水際が明らかに付いたか、堕ちてよし上がってよしと往生の一段に手が離さ

れたか、露塵程も疑いが無くなったか、現在で即得往生出来たか、はつきりした親

に明らかに逢うたか、一切の無明は晴れ亘り一切の志願が満足されたか、聖人様と真の兄弟

に成れたか。

よい加減な妥協では薄紙は晴れないぞ。お説教の口真似では疑いは除かれないぞ、

御聖教の文字だけ読んだのでは合点は行くけれども、広大難思の慶心は得られないぞ、

理屈だけ判ったのでは信樂開発の水際が判らないぞ、人の晴れた世界に調子を合わしてい

るのは真似であつて真実ではないぞ。

真宗の道俗よ、他力や唯や其の儘にかぶれていて 真に苦抜けの世界へ出なかつたら

大安心が得られないのだ。 百利行く者は九十里を以て半ばとしなければならぬのに、

二三十里行つて既に百里の決勝点に入つた積りでいるから、明らかな解決が付かないのだ、

真剣な求道を抜きにして、無努力を他力の様に心得ているから真の易さが判らないのだ。

疑いの闇を見出し切らないのだから晴れた尊さが味わえないのだ。 信仰を文字を読んだ力

で片付けているから不可称不可説不可思議の妙味が判らないのだ。 言葉の上では信前信後

変つた事はないけれども 生花と根のある花との別が有るのだ。 何故合点だけに止めず

真剣に実地に切り込まないのだろうか。 教える知識に明かな世界が恵まれていなければ、

求める人に闇の晴れよう筈がない。 理屈の判つたのを信仰と思つてゐるのだもの、残念だ、

残念だ、私一人でも責任負うて叫び届けて上げなければならない、一切の求道者よ、あなた

の心を御聖教に合あわして喜よろこんでいてはいけないのだ、散乱さんらんのあなたあなたの心こころの噴出ふきでる儘ままが六字

の宝珠ほうじゆでなければならぬのだ、あなたの言葉ことばの儘ままが御聖教に顕あらわれているのに驚おどろく程ほどになら

れるのだ。あなた自身じしんが現生不退げんしようふたい、正定聚しょうじょうじゆくの位くらゐに住じゆうする事が出来できるのだ。あなたの動うごかな

い心こころが動うごいて魂たましい一つが即得往生そくとくおうじようする事が出来できるのだ。既に心こころの中に曇くもりが有ある以上晴れ

た世界せかいが恵めぐまれなくてどうする。凡夫ぼんぶにははつきりした事ことがないと教おしえるが、はつきりと

は疑うたがいの晴はれた味あじであつて 晴はれなくては聞きいた所しよせん栓せんがないではないか。凡夫ぼんぶに晴はれたか

晴はれないか判わからないと言いっているが、凡夫ぼんぶに判わからなくて誰だれに判わかるか、曇くもつたなりでは疑うたがいな

がらの往生おうじようではないか、晴はれたお慈悲じひを聞きき抜ぬけば晴はれることは必定ひつじようである。真剣しんけんの求道きゆうどう

がないから心眼しんがんを開ひらかして戴いたく域いきまで進すすまれないのだ。火ひの中なかを分わけても進すすむ意氣いきがない

から開発かいほつしないのだ。宿善しゆくぜんを寝ねて待まっているから来こないのだ。何故なぜ自分の柄がらを見みな

い、何故なぜ自分の自性じしように触ふれない、何故なぜ実機じつきの悪性あくしように驚おどろかない、これを見みれば何時いつ迄まで経たつても

夜は明けないと言うが、法を見て居れば夜は明けるか、明けても凡夫には判らないと言つて居るではないか、判らないのなら明けたのではないではないか、死んで五十二段が超証されるのなら、生きている今現生不退の位に入らなくてどうする、現生不退は正定聚の菩薩ではないか、等正覚ではないか、弥勒に等しい、諸仏如来と肩を並べているのではないか 広大勝解の人ではないか 妙好人稀有人最勝人とほめられる身になっても猶ほ機を見るのが恐ろしいか、手間が掛かると恐れている間は解決が付いた大胆な信仰ではないぞ、手間が掛かると蓋をしていて何時解決が付くか、親が知っていても今迄自分が知らなかったから 切りと墮とされる迄真剣に成らなかったのだろう、この動かん機を動かす為に釈尊も八千遍の御苦労の有った事が実地に求めないから判るまい、動かんと投げ捨て置いて動く時があるものか、それでも聖人様は「いづれの行も及び難き身なれば」と仰せられてあるではないか、聖人様が仰せられたのであなたが仰せられたのではあるまい、 自分が自力計度の感情と

魂たましいの底そこに蟠わたかまる自性じしやうと闘たたかわして見て、理屈りくつは判わかるが判わからん心こころのいる事ことに驚おどろき 実地じつち出離しゆつりの縁えん

ある事ことなしと、望のぞみの綱つなが切きれた時ときでなければ、自力じりき無効むこうと手ては離はなれないぞ、御聖教おしやうぎやうの言葉ことばに合あわしたのでは八万はちまんの法蔵ほうぞうを知しつても後世ごせを知らしない人ひとだぞ。

この機きは千年せんねんたつても動うごかんから動うごかん儘ままをお助たすけじやと言いっているが、動うごかしたことの無ないものが何なにを言いっているかい、御聖教おしやうぎやうに誰様だれさまがそんな馬鹿ばかを仰おおせられたか、動うごかぬ機きが動うごかされなければ不思議ふしぎではないぞ。

それでも此この機きは慶よろこぶやつでない、慶よろこぶ奴やつでない者ものが慶よろこばずにいられない迄まで聞きかないから、よい加減かげんの処ところに腰こしを据すえているのではないか。

それでも「歎異抄たんいしやう」には「喜よろこぶべき心こころをおさへて喜よろこばさぬは煩惱ぼんのうの所為しよゐなり」と仰おおせられてあるではないか、馬鹿者ばかもの！ 信後しんごの懺悔さんげを信前しんぜんに持もち込こんで疑心ぎしんの誤魔化ごまかしにする奴やつがいる

か、喜び得ないのを手柄のように思い、聖人様でさえ喜びえないと仰せられたから凡夫にそんな大きな喜びの有られよう筈がないと、未信の人の上塗りに用いているが聖人様がお嘆き遊ばすぞ。

聖人様の信仰は実地に悩みぬいて総ての尽きた時を「いづれの行も及び難き身なれば」と投げ出し、総てを赦されて「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり」と飛び上がり、此の一念の瞬間を「立ちどころに他力摂生の旨趣を受得せり」と、其の境地を「廣大難思の慶心を彰す」と仰せられ、信後の懺悔を大悲に攝取されていながらも動く煩惱を見つめて「喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩惱の所為なり」と述べられたのであって、このお言葉を盲人が棒を振り回す様に、信前の人の前で用うれば聖人様まで信前に引き下ろす事に成るではないか、畢竟用うる人の解決が付いていないから信前信後の味が判らないのではないか。一体信前信後は何処で分けるか判っているのかい。同行達の

煩悶が何処迄進んでいいると言う位の脈が判るのかい。盲人滅法で施薬をすれば薬も毒薬と変わるぞ。

人の魂の羅針となる大導師の自信が抜けてはいないか、真に門信徒の要求に応じ、指導し得る自信が有るか、自覚が有るか。

それでも御文章には「十人は十人ながら百人は百人ながら」と仰せられて有るから皆往生ができるではないか、其の通りお言葉に間違いはないのだ、而し其の御言葉通りに間違いなくなつたか、而し其の前には必ず「一念の信定まらん輩は」と書いて有るが、勝手の良い処だけ切売りしたのでは実地が通れぬぞ、「一念の信」の妙味が判ったかい、此の妙味を諦得しさえすれば真仮の水際も、真宗の角目も判るのだ、ここで衆生が生き親も生き、八万の法蔵も読み破れ、三千世界が揺らぐのだから甘いことでは判らないぞ、難中の難とはこの関所のことだが本当に通過できたか、出来たものなら、明らかな事が有るとかないとか、そんな大

きな喜びよろこが凡夫ぼんぶに有あられるかとか、人を異安心いあんじんとか間違まちがい者ものとか言いえる筈はずがないぞ。

「あら心得易こころえやすの安心あんじんや、ゆき易やすの浄土じょうどや」と蓮如上人れんにょしょうにんが仰おおせれてあるから、そんなに難むずかしい

法ほうではない。それなら大経下巻だいきょうげかんの末尾まつびに、僅わずか四行よんぎょうの間に九字じゅうじも難なんの字じを用もちいられ、

小経しょうきようには「一切世間いっさいせけん甚難稀有じんなんけうの法ほう」「難信なんしんの法ほう」、聖人様しょうにんさまは「真実しんじつの浄信じようしんは億劫おつこうにも

獲難えがたし」「真実しんじつの浄信じようしん実じつに獲うること難かたし」正信偈しょうしんげにも和讃わさんにも難なんの字じは沢山たくさん並ならべてある

が、蓮師御一人れんしごいちにんの易やすいが本当ほんとうで、真実しんじつの経きようや祖師そしの難なんと仰おおせられたのは嘘うそか、畢竟真仮ひつきようしんけ

の水際みづぎわを知らしないからだ、実地求道じつちきうどうした事ことがなく、文字もじだけ読よんでいるから判わからないの

だ。耳みみに聞き眼めで読よんでいる時は、易やすいを易やすいと知しっただけだ、実地じつちの求道きうどうが難中なんちゆうの難なん

であって、開発かいほつの後のち（信後しんご）は易やすいと言いう言葉ことばまでもいらやない易やすさでああったから「あら

心得易こころえやすの安心あんじんや」と仰おおせられた事ことがわわからないのか。

仰あお願ねがわくば一切いっさいの道俗どうぞくよ！

信樂開発しんぎようかいほつの仏智不思議ぶつちふしぎに打うち明あかされ、一切いっさいの疑網ぎもうが

切り墮おとされ 即得往生住不退転そくとくおうじようじゅうふたいてんし、身みも心こころも南無阿弥陀仏なむあみだぶつに成ならなければ夜よが明あけたの

ではないぞ、 真仮しんけの水際みずぎわが判わからなければ 疑うたがいの「ひよつと」は決けつして除のぞかれはしない

ぞ。

信仰しんこうの道みちは程遠ほどとおいぞ、 そんな生なまやさしい妥協だきようでは本ほん当とうの安あん心じんは獲えられないぞ、 未まだ未まだ

信仰しんこうの決勝点けつしょうてんに入はいってはいないぞ。 入はいった真似まねしている間あいだも 報謝ほうしゃも出で来きれば人ひとも導みちびける

けれども、実地じっち問題もんだいが抜ぬけているだけである。 実地じっちが無なければ画えに書かいた餅もちだから

臨終りんじゅうの食たべたい時ときに間まに合あわない、 自じ分ぶんの心こころが満まん足ぞくする迄まで 聞きき抜ぬかなければならない

ぞ。

次つぎの様ような機きは、皆信前みなしんぜんに動うごいている。

1、真宗しんしゅうは只ただと仰おおせられるから骨ほねを折おる事ことはいらない。

2、 どれだけ煩惱ぼんのうは動うごいても疑うたがいさえせねば助たすかると安心あんしんしさえすればよい。

3、 この墮おちる機きに掛かかり果はてて下くださったのだから私わたしは間違まちがうても親おやが違ちがわさん。

4、 素直すなおに聞ききさえすればよいのに何故なぜ人様ひとさまは判わからない判わからないと言うのだろうか。

5、 こんなに煩惱ぼんのうの起おこる奴やつめを此このままながらのお助たすけとは如何どうした仕合しあわせ者わであろうか。

6、 お説教せつきょうを聞きく度毎たびごとが初花はつはなで今死いましんでも往生おうじょうに間違まちがいがないとは有難ありがとう御座ございます。

7、 お慈悲じひのお蔭かげで忍しのばしても戴いたき施ほしもさして戴いたきます。

8、 御聖教おしょうぎょうの通とおりに私わたしは疑うたがいなく助たすけて戴いたくことと安心あんしんしているから大丈だいじょうぶ夫。

9、 「はい」の返事へんじも向むこうからどうしたお慈悲じひの親様おやさまであらうか。

10、これ程有難いお慈悲じゃもの誰が何と言っても動きはせぬ。

11、喜ばんこの奴を無理から連れて往生さすとはどうした嬉しい事だろう。

12、夜の寝覚めでもお称名の出てくる嬉しさ、之を他力催促の称名と言うのだろう。

13、誰にでも言つて聞かしたい、引き入れるのが御恩報謝じゃもの。

14、こう迄お慈悲は有難い、法の為には生命を捧げてもなんともない。

15、私がこれだけ堪えさして戴くのも御法のお蔭で御座います。

16、私は雑行も雑修も自力の心も振り捨てて一心にたのまして戴いているから 安心だ。

17、何とか成れと仰せられたら大事じゃが、成れんままとは有難い。

18、此の位の事は凡夫だから仕方がない、なおして来いとは仰せられない。

19. しるしのないのがしるしじゃそうな、なんともないから有難い。ありがた

20. 国くにに一人か郡こおりに一人かと言うほど難むずかしいものを、私は易わたし やすく戴いただかして貰もらったのは厚あつい因縁いんねん

で御座ございます

②1 仏様ほとけさまのお計はからいじゃもの、私が疑わたし うたがうたとて疑きい切る様ような上等じょうとうな柄がらではありません。

②2 知しって来おいの仰おほせじゃないもの、知らんまんまのお助たすけとは有難ありがたい。

未まだ色々いろいろな案あんじ振ぶりは有あるけれども、百ひゃく里り行ゆかねばならないものとすれば 三四十里さんしゅうしりの処ところ

まで行しんこうった信仰しんこうである、そして骨ほねを折おらないで只ただを只ただと思おもい、向むこうばかり眺ながめた自信じしんの抜ぬけた空からっぽの信仰しんこうで苦くが抜ぬけた積つもりで自惚うぬぼれている。お聖教しょうぎょうに調子ちようしを合あわしては喜よろこんでい

る、この時ときは信前しんぜん信後しんごの水際みずぎわは立たず、何時いつとはなしに戴いただいたのだと安心あんしんしているが、お聖教しょうぎょうには何時いつとはなしに戴いただくとは仰おほせられてはいないぞ、私わたしだけは素直すなおに聞きかして戴いただい

ていると思うのが、きようまん 憍慢の悪衆生あくしゆじやうで何処どこに素直すなおな処ところが有あるかい、
未だ未だ疑うたがいの芽めが萌きざさ
ないのではないか、
右みぎの桁けたにいながら他人ひとの真剣しんけんな求道きゆうどうを笑わらっているではないか、

じゆつぽうほうかい 十方世界が我が物ものじゃと苦くの抜ぬけた人ひとを見ては、そんな大おおきな喜よろこびが凡夫ぼんぷに有あられるもの
かと自分じぶんの機きの抜ぬけた尺度しやくどで批評ひひようしている時は、其その儘ままが邪見憍慢じゃけんきやうまん謗法ぼうほう闡提せんたいの悪魔あくまではない
か、
悪魔あくまが悪魔あくまだと映うつらないのは機きを見みないで法ほうの鏡かがみばかり眺ながめているからだぞ。

そんな浮草うきぐさの様な信仰しんこうで臨終りんじゆうの関所せきしよが通とおれるものか、皆自力計度みなじりきたくの信しんではないか、大安心だいあんしん
は何処どこで付ついたか、未だ未だ先さきに行いかなければ疑うたがいは出でて来こないぞ。

ごじゆうり 五十里から九十里位迄りくくらいまでの信仰しんこうの氣持きもちは

1、只ただとは仰おほせらるるものの、私わたしの様に悪わるい心こころが出でて来きてこれでよいかしらん。

2、いや、機きを見る事ことはいらない、仏様ほとけさまがよくよくご承知しょうちの上うえでご成就じやうじゆなされたのだから。

3、そうは言うてもひよつと間違^{まちが}うたらいけない、兎^うの毛^け大山^{たいさん}と言うから。

4、知識^{ちしき}の処^{ところ}へ尋^{たず}ねて行き、どうも成^なれませんかと言^いえば、それより他^{ほか}に何^{なに}が有^あるか叱^{しか}られる。

5、何故^{なぜ}今^{いま}迄^{まで}の様^{よう}に喜^{よろこ}びが続^{つづ}かないのだろうか。

6、喜^{よろこ}ぶ時^{とき}や報^{ほう}謝^{しゃ}の出来^{でき}た時^{とき}には参^{まい}れそうなが、嫌^{いや}な心^{こころ}が出^でるとどうも参^{まい}れそうにない。

7、夜^{よる}の寝^ね覚^ざめにあれ程^{ほど}涙^{なみだ}が出^でて慶^{よろこ}べたものが今^{いま}は砂^{すな}をかむ様^{よう}で何^{なん}ともない。

8、何故^{なぜ}あの人^{ひと}の様^{よう}に喜^{よろこ}べないのだろうか、自^じ分^{ぶん}のがひよつとしたら違^{ちが}うのではなからうか。

9、人^{ひと}に不^ふ審^{しん}を尋^{たず}ねようと思^{おも}うけれども今^{いま}更^{さら}どうだろうかと問^とわれもせず。

10、落^おちる者^{もの}をお助^{たす}けでよいではないかと言^いわれるけれども、氣^きばさがやまない。

11. 一寸^{ちよつと}も有^{あり}難^{がと}うない様^{よう}な氣^きがするがこれでよいだろうか。

12. お慈^じ悲^ひが戴^{いた}けたのなら今^{いま}少^{すこ}しは變^かわりそうなものじゃに、益^{ます}々^{ます}腹^{はら}も立^たつ。

13. 聞^きけば聞^きくほど薄^{うす}紙^{かみ}一^{ひと}重^えが邪^じ魔^まになつて自^じ分^{ぶん}ながら後^{あと}すざりする様^{よう}な氣^きがする。

14. 嗚^あ呼^あ今^{いま}迄^{まで}は何^{なに}をくよくよしていたろうか此^この儘^{まま}ではないかと片^{かた}方^{ほう}離^{はな}して又^{また}握^{にぎ}る。

15. 其^その下^{した}からそれではいかと頭^{あたま}を上^あげる嫌^{いや}な機^きが出^でて来^くる。

16. 信^{しん}仰^{こう}が薩^{さつ}張^はり判^{わか}らなくなつて何^{なに}を聞^きいても受^うけ付^つけてくれない。

17. 私^{わたし}はこんな忙^{いそ}しい中^{なか}を参^{まい}つて来^きたのに喩^{たと}話^えなど聞^ききに来^きたのではない。

18. 人^{ひと}様^{さま}にはこんな煩^{はん}悶^{もん}は無^ないのであろうか、思^{おも}うまいと思^{おも}えど疑^{うた}いの曇^{くも}りが出^でてくるが。

これでよいのであろうか。

19. 何故私一人は聞いてくれないのだろうか、唯が唯と判らないのだろうか。

20. 訳も理屈も判っていて、はいと返事が出来ないのだから苦しいではないか。

21. 茲迄くれば知識を選びをせずにいられない。

22. 誰が何と仰つてもこの疑いが晴れるまでは聞き抜かずにはいられない。

23. 機を見るから手間が掛かるとでも言おうものなら、機を抜きにした法が有るものか、あんな知識は未だ抜けてはいないと見下げる。

24. 判っていて判らないのが残念じゃと鞭を打って進む。

其の人其の人で思い振りは違うか知らないけれど、未だ深刻に切り込んだのではない。判り

たいのが腹一ぱいで何か握らねば堕ちそうでないから、今度聞けば判ろう、助かろう、はつきりするだろうと法に向かつて突進するのである。行けども行けども五里霧中、この時よい知識がないと、腰を据えて動かなくなる。九十里から九十九里に達する間が真に難中の難であつて、言葉にも筆にも顯わされない、実地に求め抜かねばならない。

1、こう迄親切にお諭し下さつても私の心は一寸も受け付けてくれません。

2、唯も他力も其の儘も耳までは判つていて何故腹底が「うん」と言わないのだろうか。

3、その機は千年経つても「うん」とは言わないと言われるが、言わなければ満足が出来ない。
い。

4、何故私の心は周章てくれないのだろうか、大病に罹つたら聞きはすまいか。

5、順境だから聞かれないのではないか、子供か夫か死んだら驚きはすまいか。

6、早く聞き開かなければ仕事も手に付かないではないか。

7、こうも聞かれないものなら聞き初めねばよかったに。

8、今更進むにも進まれずやめるにもやめられず今の苦しさを今救うて欲しい。

9、成れん儘とは知りつつも、判らん儘とは聞きつつも、成りたい判りたいが腹一杯。

10、元の信心が楽だから崩したのを元通りにしてくれと知識に不足を言い出す。

11、一心不乱に求めるかと思えば開発の後の事を考えている。

12、未だ脇見しているが、一大事ではないかと引き戻せば平気である。

13、その癖人の足元がよく判り、あんな気のきいた事を言っているが、疑いまでは出ていな

いのではないかと謗っている。

14. 人が解決付けば自分の無努力を棚に上げて知識と其の人を怨む。

15. 何も彼も知っている事が邪魔になり、話の先回りをするから真剣に成れない、何にも知

らなければ早く戴けようものに。

16. 一大事じゃと上の心は周章るが下の心は何とも思っていない。

17. もう私は駄目じゃ、もうすっぱりやめて此の世だけなと安気に暮らそう。

18. お前はそれでよいかと下の心が頭を上げる、地獄が恐ろしくてやめ切りもせず。

19. どうしたらよいのかと泣くにも泣かれなくなる。

20. 誰か身体を縛り上げてでも教えてくれればよいと思ひ出す。

②1 寺に参らずにいられない、参っても空しく帰る、只々うろろしているばかりだ。

②② 何なんで苦くるしんでいるのか自分じぶんにも判わからない。

之これだけ進すすむと、なりも振ふりも、恥はじも外聞がいぶんもない、知識ちしきを選えらんで猛進もうしんせずにはいられない。

百里ひゃくりの瀬戸際せとぎわの苦痛くつうは一通りひととおではない、一つ間違まちがえば必墮無間ひつだむけんか、聞き得きうれば五十二段ごじゅうにだんかの境目さかいめじゃもの、能所共のうしよともに真劍勝負しんけんしょうぶじゃ。

1、心こころは次第しだい々に細ほそるばかり

2、こう迄馬鹿までばかでなかったが。

3、宿善しゆくぜんが無いなのではあるまいか。

4、知識ちしきの前まえに出でれば落ち付おく、帰かえればあわてる。

5、発狂はつきようするのではあるまいか。

6、地獄じごくと聞いても極樂ごくらくと聞いても何なんともない。

7、周章あわてて周章あわてず急いそいで急いそがず。

8、判わかって判わからず知しって知しり得えず。

9、泣ないて泣なかず思おもうて思おもい得えず。

10、驚おどろいて驚おどろかず騒さわいで騒さわがず。

11、八千遍はっせんべんの御苦勞ごくろうも私わたし一人ひとりは洩もれたか。

12、親様おやさまの唯ただは唯ただではない、こんなに苦くるしいのに。

聖人様しょうにんさまは他力たうりき真宗しんしゅうを開ひらきながら何処どこに他力たうりきが有あるか、と自分じぶんの苦くるしさの余あまりに毒舌どくぜつをはいたのだ、今死いましんだら如何どうなるか、と藻搔もがけば藻搔もがく程、泣なけば泣なく程、泣なかん心こころの「てれっ」

としている心こころが、広ひろさも知れねば深ふかさも知れず、お前まえが聞きいてくれないから墮おちるではないかと切きり込こんでも、平へい氣きで未まだ死しにはせんと言いっている、愈々いよいよ私わたし一人は聞きき切きらんと望のぞみの綱つなの切きれた時とき、実地腹じつちはらの底そこが「ぐらつと」と総崩そうくずれで墮おちた時とき、「あっ！」と今迄動いままでうごかなんだ「てれっ」とした心こころが動うごいた時ときは、「唯ただぞ」の一言いちごんで貫つらぬかれ、

1、親様おやさま！唯ただとは此この儘ままでしたか。

2、動うごかん心こころが動うごいたとは不思議ふしぎで御座ございました。信心しんじん歡喜かんぎ踊躍ゆやく歡喜かんぎせず*に*いられるものか。

3、今まで不足ふそくを言いっていた全ぜん部ぶがここで赦ゆるされ、身みも心こころも南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。

4、ああら心こころ得易えやすの安あん心じんや、行ゆき易やすの浄土じょうどや。

5、墮おちてよし、上あがってよし。

6、信じ切らなかつた私が信じられた事を信ぜずにはいられなかつたのだ。

7、疑うて見ようとしても疑う余地が無くなつた。

8、機を見てよし法を見てよし。

9、今迄邪魔に成りよつた煩惱が悉く慶びの縁と成るとは不思議でならない。

10、死んでから往生かと思つていたら今摂取不捨の御利益を蒙つたのであつた。

11、見れば見るほど照らされて報恩の出来ない浅間しさを懺悔せずにはいられない。

右の様に、私の信仰の道に当てて書き連ねて見たが、
猶詳細は『入信の道程』に記して

ある。
只々信仰を死後にのみ役立つ様に考えたり、
真の解決まで行かずに理屈の判つた

のを 安心戴いたように片付けたり、
自分の求道のないのを他力の様に思い、
他人の

真剣な態度を異安心じやと冷笑するのは、
邪見憍慢の悪衆生であると懺悔し、
疑網の断

除じよされる迄、信樂開発しんぎようかいほつ、真仮しんけの水際みずぎわの明あきらかになる迄進まですまなければならぬ。

百里ひゃくりに到達とうたつする迄を信前しんぜんの機きと言いい、調熟ちようじゆくの光明こうみように照てらされていると言いうので、一切いっさいの

無明むみようの闇やみは晴はれ、一切いっさいの志願しがんが満足まんぞくされた時ときが到達とうたつしたので、信樂開発しんぎようかいほつとも信心獲得しんじんぎやくとくとも

信後しんごとも撰取不捨せんしゆふしゃの光益こうやくに預あずかつたとも言いうのだから、動かぬ心こころが動く迄までは求道きゆうどうしなければならぬ。

最後さいごに一言いちごん、真似まねは真似まねであつて、真実しんじつではない。